



結婚したその時から、二人は、母船から離れて、小さなタッグ・ボートに乗る荒海に出発します。「結婚する」と、言教師になるのと、は、祈りから決めるてはなりません」と申した方がいました。結婚するとは、言教師を志すのと同じ覚悟と決断とを要するところとなるのです。

確かに、どうか結婚すれば後悔し、結婚しなければ、これまた後悔します。生まれも、育ちも全く違う二人が、結婚したその日から、同じ屋根の下で寝起きをともにすることになったら、これほど不思議なことはありません。

夢心地は一年、いや半年、いや、ヶ月でじゅうか。あと、少しですし、わがままな顔が出はじめ、「こんなはずじゃなかった」「と列した時は後の祭です。こまやかに思われた女性が神経過敏であったら、男らしく思った相手が、粗野であったらすることは決してありません。

失望と幻滅との後は「嗚呼、一生我慢するしかないのか、それとも、別れるしかないか」「と追いつめられます。しかし、わが子がいらねえもありません。昔からの「子は鎚」(かすがのこ)と言われますが、「この子がいるから、何とか今まで我慢してきました」と証する夫婦が多々あります。

世間では、7年目の危機という言葉がありますが、銀婚式までが11の節目であるのは、金婚式にまでたったら、これはもう、ただ、「嗚呼……」と絶句する他ありません。長く連れ添ってきた夫婦の姿には、年輪の重みを感じます。

他人から見れば、あれは馴れ合いだ、やれ、腐れ縁だと厳しい目で見られるかもしれませんが、しかし、他人がどう言おうと、お互いが許し合っているものです。それでなければ、互いの関係はたちまち破綻してしまいます。もともと、血のつながりがない二人です、別れれば他人同士となります。

そこでした、まことと、あやうし、破綻せず二人の関係であるとしたら、教会がキリストに従うように「この大前提を無視できません。キリストが身をもつて示して

くださった」赦しと愛」とに深く根差さない限り、二人の関係は、次第に、おかしな、ぐびじになることは避けられません。一方が他を支配したり、逆に他を利用するだけであってはなりません。

新約聖書には、「互いに許し合いなさい」との勧めをたむかひます。

おそろしく、夫婦関係の厳しさを味わったのは、預言者「ホセア」ではなかったでしょうか。不貞をおかした妻「メル」ー、その妻を許し、受け入れよとは、あまのにも理不尽な求めです。しかし、主なる神からの求めをホセアは受け入れました。

仮に、互いが許し合うことがなければ、たとえ、二人がどんなに気を使い、親切をなしても足元から崩れます。「教会がキリストに従うように」が、やはり二人のすべての基準です。キリストの十字架の赦しと愛は、結婚生活の基盤であり、揺るがぬ土台であります。

キリストの教会が十字架のキリストから目を離してはならないように、妻も夫も絶えず十字架の主イエスから目を離さないように心しなければなりません。

(2)

次は「仕え合うなさい」です。

10章の5章の20節と21節との間には、一段落があるようです。キリシヤ語原文では、20節と21節とは、しなびて訳されていますが、実は、20節と区切りされています。(共同訳はその立場です)。

すると、5章21節の「キリストに対する畏れをもつて、互いに仕え合うなさい」との勧めは、5章を超えて、6章の「親と子」「奴隷と主人」との勧めにまで関連しているようです。とすれば、21節の「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい」は、妻にも夫にも勧められている御言と見なすことができませぬ。

確かに、妻は夫に従い、夫は妻を愛せよとの勧めですが、結局は、21節の「互いに仕え合いなさい」が両者に共通している勧めではないでしょうか。

しかも、ただ、「愛しなさい」「ただ、従いなさい」ではなく、「キリストが教会に仕えらるるよう」「と、

でも、二人は「教会がキリストに従うように」という関係からすべてを見直さねばなりません。

わたしたち夫婦は、今となっては、どっちが仕え、どっちが仕えられているかは分からなくなりました。振返れば、互いに仕え合ってきたともいえます。どっちが上位で、どっちが下位であり、どっちが右で、どっちが左かなどということは、もはや気になりません。今や、平等・同等・互恵の夫婦とさせていただきました。

7年前、S字結腸のカンと判明し、手術を受けましたが、半年毎に定期検診を受けなくてはなりません。ところが待合時間が長いのです。その間、スイスの神学者・K・バルターの「キリスト教倫理」(交わりの自由)、「男の心」・「女の心」の二冊の目録をさがしてあります。

「男の心」は何か、それは、「相手から要求される前」に、威張りもせず、あたらしい心で、なっぴなっぴ、自ら率先して責任をとることをやめました。「目が鱗」の思ひです。

夫婦の間には何度も危機が訪れます。まな、「花も嵐も踏み越えて」です。予期も予想もしない突発的な事故・事件が二人の間に起きます。そうした時、全ての責任は自分にあるとするか否かで、「男の心」が判断されると言ひます。

それが万一、妻の不注意・不始末から、わが家が出火して、全焼したとしても……です、それを自らの責任として受け止める、自らの不注意と管理不行き届きがあったと反省するか否か……です。

万が一、五体満足でない子が与えられたとして、それでも、俺の家にこんな血筋はないと妻をなぐることもなく、自らの責任として受け、妻をとがめたり、威張る散りたりのことなど、「わが」男の心「である」といふのです。脱帽の感があります。

牧師の責任は、宗教法人「代表役員」だけとは限りません。教会に起こることは、自分の責任であるという自覚しなければ、決して務まらない立場で、自らに言い聞かせてきました。

ある時、祈禱会の最中、お子さんが教会の二階から、「あ

あ……」という叫び声と共に、転落しました。下は「ソクリートの道路」です。一瞬、青ざめました。「近所の人たちも声を聴いて駆けつけてきました。どなたかが救急車を呼んでくださり、病院に搬送され、レントゲンの検査を受けました。何と、右手骨折の診断です。守られたのです。わたしは病院に向う救急車の中で、万が一にも、後遺症が残ることがあったり、命に差し障ることがあれば、牧師として、もはや教会に身を置けないと覚悟していました。

二階の小窓をこじ開けた子供も、母親の管理不行き届きも、共に責めることはできません。しかし、教会内で起きたこととすれば、それが如何なることであれ、全責任は牧師のわたしにあります。他に転嫁することはできません。入院費用の一切を教会で支払うことを、役員会で即座に決めました。

少し脇道にそれたようですが、この時、最後「女の心」ですが、「いなか」も、女であることを卑屈として、いなかも、相手に嫉妬を感じない。まして、男から攻撃されているとは思わない。彼女は、自分自身についての心遣いをなおせにせず、喜びと誇りを持って、男と並び、男と共に、自由な人間としてふるまうことを喜びとする女性となる」と解説されました。

夫に従うことを喜びとする妻がいるとこのことは、すべての責任を担おうとする夫がいるのであります。

ある時、婦人会の皆さんに、「ぶしつけな質問をしました。「主人に心から従いたいと思っていますか。それとも、支配されたいと思っていますか……」と尋ねたことがあります。

婦人の皆さんは口をそろえて、「勿論従いたいです」「でも、しかし……」が答えました。

「従いなさい」は、妻だけに求められている勧めではありません。夫も妻に「仕える」・「奉仕の精神」は必要とされます。

今朝は、なかなか、結論とありませんが、「教会がキリストに従うように」「従う」とは「これを念頭におきつつ、良き夫婦であることが願われます」。

## 【祈ります】

天のおとうさま、今日まで二人の旅路を守り導いてくださいましたことを感謝します。ふりかえるたびにすへてが感謝のうちに過ぎたように思われます。もう終わりがと思う危機に幾度か出会いました。経済的危機、病気の危機、人間関係の危機もありました。しかし、いまそれらをのりこえて現在にいらりました。これからもキリストのため、人のために生きるものとさせてください。キリストの名によって祈ります。アーメン。